

# 地域特産種増殖技術開発事業（亜熱帯磯根グループ：タカセガイ）

## 基礎調査・資源添加技術開発（要約）

久保弘文

### 1. 目的

サンゴ礁浅海域の重要磯根資源であるタカセガイに関する増殖技術開発を行う。特に基礎調査として、増殖対象地区（恩納村・伊平屋村）の市場実態の把握や資源管理の実証試験、資源添加技術開発として放流種苗の追跡調査、室内水槽での食害動物試験を行い、栽培漁業の事業化をめざした基礎知見の集積を図る。

### 2. 要約

#### 【基礎調査】

市場実態と資源管理認識定着化指導を実施した。増殖対象海域の恩納・伊平屋とも年漁獲量は2トン程度で低い水準であった。kg単価は昨年の高騰から下落傾向が強いが、年平均では1988年より高値をつけた。身はセリが行われている恩納村のみの結果で、ほぼkgあたり5000～6000円の高値取引が安定した。資源管理の方は恩納村で設定している禁漁区で一般漁場の約3倍の資源量が推定され、大型の貝が多く、産卵母集団の形成が出来た。

#### 【資源添加技術開発】

増殖対象海域（恩納村・伊平屋村）に平均殻径8.3～32.8mmを116,735個放流した。小型種苗の放流は前年同様、生残率が低迷した。食害動物の除去を検討したが成果は得られなかった。放流サイズ検討の為、ハリセンボン、フトユビシャコ他3種の食害動物を用いて捕食限界サイズを調べるための試験を実施し、これらの食害を防除するためには殻径30mm以上の種苗放流が望ましいと推定された。それを受けて、30mm種苗の放流試験を2回次実施した。1回次は食害された死殻が多く、生残も低かった。放流後14日で14.9%であった。しかし2回次は前回より生残率が向上し、放流後21日で33.2%と2倍以上留まった。両回次には種苗育成時の条件、放流直前の処理等で差があったが、さらに現場での種苗状態の観察、食害痕（死殻）の分析、食害動物（巻貝）の密度を併せて考察した結果、種苗活力に起因する可能性が示唆された。また両回次はより小型の種苗も同時に放流したが、特に2回次ではサイズによる生残率の差が明瞭に見いだされ、30mm種苗は最も高かった。